



第 163 号

二〇二二年六月三〇日発行

発行者 奈良県立
橿原考古学研究所

奈良県橿原市畝傍町一番地

編集者 高木清生

私たちの考古学

青柳 正規

一、はじめに

令和三年度に入ってから東京や関西圏では緊急事態宣言が出されるなど、新型コロナウイルス感染症に対しては予断を許さない状況が続いています。さまざまな制約規制のため円滑に進まないこともあるかもしれませんが、このような状況でも橿原考古学研究所としての調査研究等の業務は滞りなく継続していけるよう努力していきたいと思っています。

二、考古学はどのような学問か

今回は、私たち橿原考古学研究所が携わっている考古学というもののどのような学問なのかを一度確認したいと思います。というのも、今年の正月に考古学に関わるテレビ番組を見て大変失望したものですから、一度きちんとした考えを確認してお

きたいと思いました。

学問の世界というものは大きく三つに分かれるのではないかとよく言われています。一つめは、理学部で行っている物理のような学問が最も典型的ですが、知りたいという好奇心を満足させるためにそれを中心として研究を進めていく“Curiosity Driven”です。日本の科学史を専門にしている村上陽一郎さん（東京大学・国際基督教大学名誉教授）が生み出された言葉ですが、言い得て妙だと思っていますので私も使っています。二つめは工学部のような学問で、社会的な要請をどう解決していくかという“Mission Oriented”です。三つめは、人文系の学問で系譜学的な制約を受けながらそのもとで学問研究を発達させていく“Genealogical Restriction”です。

次 目

私たちの考古学

島本一が報告した橿原市新口町の前期古墳

令和元年度韓国派遣報告

ひとの動き

考古学というものを考えた時には、

例えば行政発掘のような“Mission Oriented”的な要素がある場合もあれば、純粹に古墳時代のある段階を研究したいということで科研費などをとって行う研究調査では“Curiosity Driven”に入る場合もあるのではないのでしょうか。しかしながら、全体としてはそれまでの考古学上の成果に基づき、それを発掘調査で少し拡張したり、延長したり、先に進めるといいうことで、やはり人文系の“Genealogical Restriction”という制約も受けているでしょう。そうした色々な面を考古学は持っていると思います。

そういう意味で、考古学は人文系の中でも総合学としての性格が強い学問分野ではないかと考えています。しかも、科学分析等を行わなければならないということで、人文系の学問分野としては最も自然科学に近い分野でもあり、非常にテリトリーの広く深い学問分野ではないかと思

ます。

三、橿原考古学研究所の目指すもの
我々は、その分野で何をやろうとしているのか、少なくとも橿原考古学研究所が課題の中心として置いているのは、今の奈良県もしくは大和という地域において、旧石器時代から縄文、弥生時代とずっと下ってきますが、さまざまな時代のそこに住んだ人間の営為というものを解明していくこととすることです。そしてその営為を歴史的な縦軸の中にどう位置づけるかということ、あるいは文化というものを相関関係のある文化的な空間の中でどう位置づけるかということであり、これが一番大きな仕事だと思っています。

研究所の仕事を進める上で非常に重要なことは、例えば弥生時代中期であれば、弥生時代中期の大きなイメージを持ちながら、その中である地点の発掘調査がどういう位置を占めているのか、そしてより濃密に全

青柳 正規 1
杉山 拓己 2
重見 泰 4
編集 部 8

体像を再現できるのかという意識にあります。

常に各時代の全体像を頭の中で立体的に描いて、その中に発掘調査で明らかになりつつあることをどのよう組み込んでいくかを考える必要があります。同時に全体像をより具体的に、明確に、濃密にしていくなために、発掘調査と研究を通して貢献していくのだという意識を持つことが非常に大切ではないかと考えています。

その全体像をイメージしておけば、例えばある遺跡の発掘において全く異なった地点の発掘成果というものを、全体像の中に組み込みながら相関関係を作っていくことができるのではないのでしょうか。それにより、研究所が課題として持っている、大和における人間の営為を歴史的、文化的に位置づけるといったことがより明確化するのではないのでしょうか。所員には各発掘調査は担当者が別々でも、その全体像の中で相関関係を与えられるということを、ぜひ意識していただきたいと思います。それをより具体化するために、異なる地点で各自が得た調査・研究の成果を共に語り合い、検討し合いながら、各時代の全体像を構築していく努力

をしていければと思います。

考古学は大変クリエイティブな学問であり、研究所はその担い手です。クリエイティブなことをやるためには大変な労力と努力が必要だという意識が必要です。労力をかけ努力をすることでしか新しい知見は得られないし、具体的にしっかりとした知見こそが新たな解釈を可能にしてい

島本一が報告した橿原市新口町の前期古墳

杉山拓己

一、はじめに

創成期の橿原考古学研究所の所員のひとり島本一¹⁾は、研究所創立に先立つ昭和六(一九三二)年、磯城郡多村大字新口(現・橿原市新口町)²⁾で発見された埴輪を学界に報告した(図1)。

この埴輪が出土した場所は現在の『奈良県遺跡地図Web』³⁾にも記載されておらず、幻の遺跡となっている。今回はその重要性を鑑み、筆者の知り得た内容を紹介したい。

二、遺物出土の経緯

島本の記述によると、遺物が出土した経緯は次のとおりである。

くと考えています。我々はそれを積み重ねることで各時代の全体像をより充実させ、より大きくし、さらに将来的には様々な時代や地域とジョイントできるようなものにしようという取り組みでいる、私はそのことを皆さんと確認し、共有していきたいと思っています。

昭和六年四月、前年の増水で決壊した飛鳥川の堤防の修築のため、多

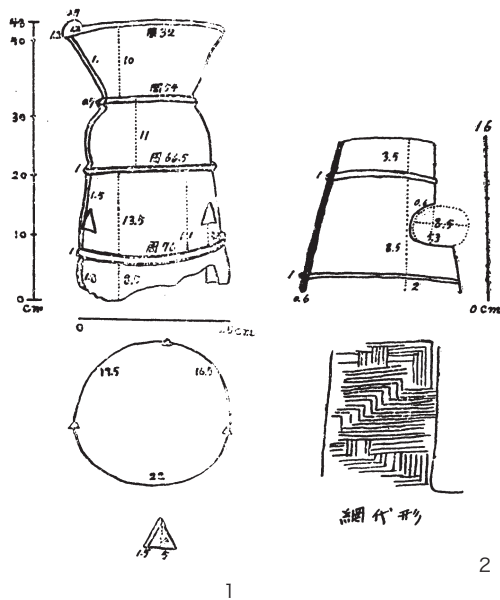


図1 島本一が報告した埴輪
(註3文献より引用)

村大字新口字大塚で土砂が採取された。四月二六日、その工事において埴輪が掘り出されたことを大阪朝日新聞社の喜多康祐に知らされた島本は、翌日に畝傍考古館の森田常治郎と喜多とともに現地を訪問し、現場監督から出土状況を聴取した。

三、出土地点の位置

島本も引用する大正一四(一九二五)年発行の県内所在の古墳墓の集成表⁴⁾には、多村大字新口字「大ツカ」所在の古墳が記載され、面積二四歩とされている。

島本は、ここに二・三〇年前には小形の円墳があったという地元の人

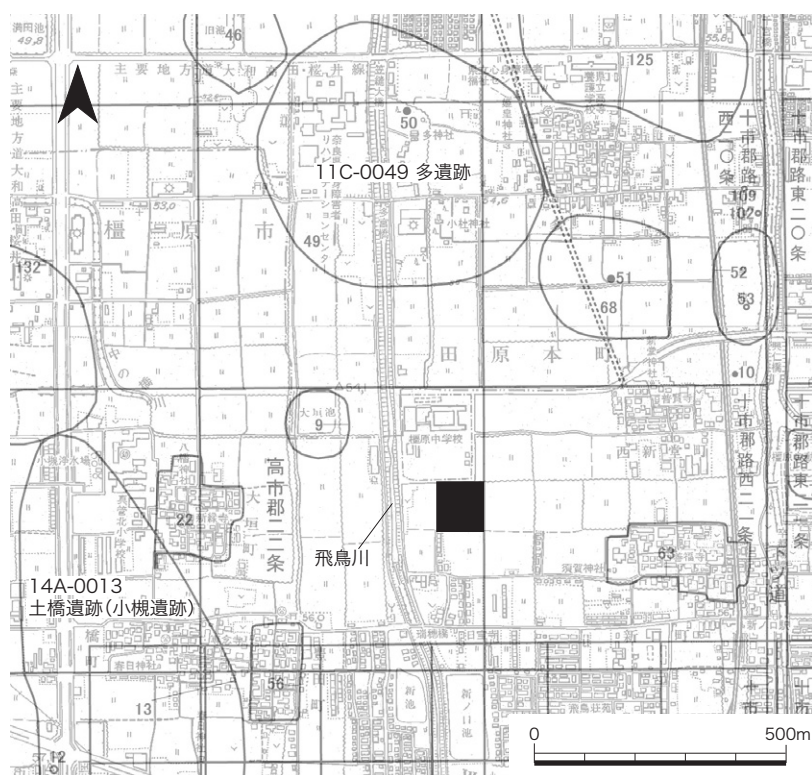


図3 「大ツカ」の位置〔奈良県遺跡地図Web〕改変

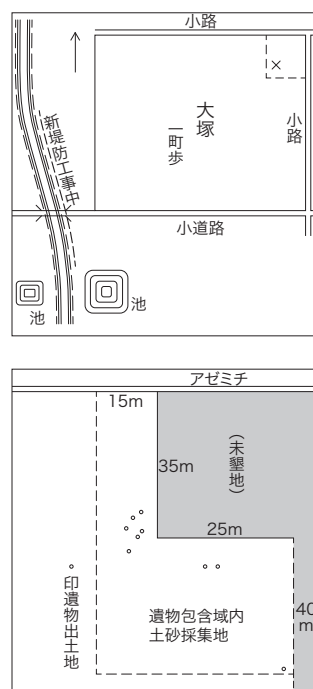


図2 島本が示した埴輪出土地点
(註2文献をもとに作成)

の証言と、遺物発見時点ですでに田園化し地表に古墳の痕跡が確認できないことを述べている。埴輪はこの地目「大塚」の北東隅から出土した(図2)。

『大和国条里復原図』⁵⁾によると、十市郡路西二一条二里に小字「大ツカ」がみられる。(図3の黒塗り部分)。この場所は島本が図示した「大塚」の位置と類似しており、飛鳥川の堤防から約一町東方とする記述とも合致する。よってここが埴輪出土地と考えて間違いないだろう。

現在、この場所は大部分が畑、一部が資材置場となっている。

四、出土した埴輪

島本は田原本警察署の許可を得て出土遺物の一部を実測し、写真から略図を作成した遺物を加えて註2文献に七点の遺物を掲載した。註3文献ではこのうち二点のみが掲載されている。ここでは特徴が明瞭なこの二点を取り上げる。

一点は上部がほぼ完存する朝顔形埴輪で、写真と実測図(図1-1)が掲載された。直口壺の口縁部を持ち、突帯間には三方向に三角形の透孔が穿たれる。

もう一点は円筒埴輪と考えられる

もので、図のみが掲載された(図1-2)。突帯が二段残り、透孔は円形である。また、「網代形の模様」が図示されている。鍵手文をもつ盾が線刻で表現されていたのだろう。この埴輪は朝顔形埴輪とは色調・焼成が異なり、薄手であるらしい。

註3文献に掲載されなかった他の五点も円筒埴輪・朝顔形埴輪の破片である。

五、遺跡の評価

この出土地点は、埴輪がまとまって出土していること、かつて高まりがあったという証言、そして大塚という字名から、古墳である可能性が高い⁷⁾。

島本が図示した朝顔形埴輪は、形態や三角形の透孔から、古墳時代前期のものと考えられる。同時期の遺跡は周辺に土橋(小槻)遺跡、多遺跡等があるが(図3)、埴輪が出土する前期古墳は現状では見つからない。この古墳が単独で立地するか、母体となる集落はどこかなど、検討すべき課題も多い。

六、おわりに

今回の検討を可能にしたのは、埴輪出土の報を受けた島本による、迅

速で濃密な資料化の結果である。島本が残したこれらの情報に今後の調査を重ね、周辺の考古学的知見を充実させていくことが望まれる。

謝辞

本稿執筆のきっかけは、黒岩康博氏の論文「島本一『考古雑筆』とその誌友」（註1文献）に接したことによる。著者の黒岩氏には稀覯書である註2文献を複写していただくなど、多大なご協力をいただいた。また、卜部行弘、東影悠両所員に助言をいただいた。深く御礼申し上げます。

註

(1) 島本については以下の文献を参照されたい。

松本俊吉「奈良県考古学研究所の先覚―故・島本一さんの業績―」『青陵』第六二号 一九八七年

窪田照久「奈良県の考古学史雑話」『考古学ジャーナル』第七二二号

二〇一九年

黒岩康博「島本一『考古雑筆』とその誌友」『史文』第二三三号 二〇二一年

(2) 島本一「奈良縣磯城郡多村大字大塚出土の圓筒埴輪について」『考古

雑筆』第四卷 一九三二年

(3) 島本一「奈良縣多村の圓筒埴輪」『考古学』第二卷第四号 一九三一年

この文献は註2文献とほぼ同じ内容であるが、出土地の位置を示した図や、出土遺物の多くが省略されている。

(4) 奈良縣「奈良縣史蹟名勝天然紀念物調査會報告」第八回 一九二五年

(5) 奈良県立橿原考古学研究所編『大和国条里復元図』奈良県教育委員会 一九八〇年

(6) 註2文献では、図2に示したものの以外に、縮尺二万五千分の一で「大塚」の位置を示した地図も掲載されている。ただし、いずれの図も正確さに欠ける点が見られる。例えば、図2上段における「大塚」北東の「x」が描かれた区画が同図下段における土砂採集地に対応するとした場合、「大塚」の範囲は大きすぎる。

(7) 島本は古墳の存在を想定しながらも、埴輪に複数の種類があること、散在して出土していること、黒色粘土から出土する点などをもって「埴輪製作所址」の可能性を考えた。後世に削平された古墳が多く知られるようになった現在では、古墳周濠埋土から出土した遺物と考えるのが妥当であろう。

令和元年度韓国派遣報告

重見 泰

一、はじめに

令和元（二〇一九）年度の国際文化交流事業によって韓国に派遣して頂いたので、その概要を報告する。

韓国での受け入れ機関は、国立文化財研究所で、平成一六（二〇〇四）年から続いている。これは、当研究所と国立文化財研究所が平成一五（二〇〇三）年に締結した研究者交換派遣の協定に基づくものだが、当年度の国立文化財研究所からの研究員派遣は見送られた。その経緯については後述する。

調査・研究テーマは、「朝鮮半島における王宮・都城と日本古代都城の比較研究」とし、朝鮮半島における国家・王宮・都城に関する調査・研究成果を整理して日本の都城形成を改めて検討する基礎データを収集することを目的とした。なお、韓国での研究活動においては、公益財団法人由良大和古代文化研究協会の第四二期調査・研究助成を受けている。

調査期間は令和二（二〇二〇）年一月二一日～三月二〇日の二か月の予定であったが、世界的な新型コロナウイルス

ナウイルスの感染拡大を受け、二週間短縮して帰国した。実働四七日である。

二、派遣まで

今回の韓国派遣はいろいろな意味で異例尽くであった。韓国派遣の打診と内示は年度の早い時期にあり、入所以来の念願がようやく叶った喜びで一杯であった。しかし、令和元年八月初旬になって、韓国側から志願者不在により交換派遣は不可という旨の連絡が入り、事態は暗転する。

折しも、元徴用工訴訟に端を発した日韓関係は最悪で、輸出規制強化の応酬、さらには、日韓軍事情報包括保護協定（GSO MIA）破棄の表明という事態にまで陥り、戦後最悪と言われるほどの状況にあった。

予定されていた国立文化財研究所の五〇周年記念式典も中止され、両国間の諸行事の多くが中止や無期延期とされていた。このような情勢下においては、韓国の国立機関が日本の当研究所と積極的に事業を展開することはもはや望むべくもなく、韓国

派遣を半ば諦めていた。しかし、当研究所の窓口である企画課の粘り強い交渉と調整のおかげで、一月になってようやく韓国側から受け入れ了承の連絡を受けることができた。感謝の念に堪えない。

派遣が正式に決まると、韓国側から訪問先と日程の提示があり、詳細な調査希望リストの提出を求められた。希望のリストは事前に伝えていたが、当初の日程にはほとんど反映されておらず、訪問先には希望リストに挙げていない機関が並んでいて愕然とした。一月中旬に改めて希望リストを提出して所在確認を進めてもらうとともに、調査目的を伝えて訪問先の再調整を依頼した。一応の所在確認が終わったと連絡があったのが二月二四日。所蔵先の資料数を確認し、最低限必要な調査期間を韓国側に伝えて、再度、日程調整を依頼した。日程の骨子が決定したのは二月三一日である。

三、活動のはじまり

一月二一日、関西国際空港発の大韓航空で金浦空港に到着した。空港には国立文化財研究所研究企画課の崔智燕さん（本文中の所属はいずれも当時）が出迎えてくださった。空

港からは地下鉄とKTXを乗り継いで大田駅まで行き、駅からは崔智燕さんの運転で毎年利用しているゲストハウスに移動した。崔智燕さんは、日程調整から宿泊先・交通機関の予約など、滞在中のほぼすべての面で大変お世話になった。

翌日、国立文化財研究所で崔鐘恵所長にご挨拶し、派遣受け入れの感謝を伝えた。所長は暖かく迎え入れてくださったが、そこで初めて一週間後に退任されることを知らされた。活動初日からこの衝撃は大きく、不安なスタートとなったのを覚えている。結局、私の滞在中には後任の所長は決まらなかった。

出国までに日程調整を再三お願いするなかで何かが噛み合っていないと感じていたが、活動二日目にしてその理由がわかった。その一番の原因は、受け入れ窓口である研究企画課から、実際に対応してくださる考古研究室や地方の文化財研究所にこちらの希望や調査目的が正しく伝わっていないことであった。その前提として、研修として受け入れ、研修内容を決めて管理しようとする国立文化財研究所の立場があり、個人研究のテーマの遂行を目的とする私の思いとの食い違いも大きかったと思

う。ただ、現地で直接交渉に入ってから調整は迅速で、実に臨機応変に対応していただいた。考古研究室の鄭聖睦さんに自身の関心や調査目的を伝えると、すぐに百済の都城に関わる研究者をご紹介くださり、当初日程になかった公州・扶余の関係機関や遺跡を訪問する手配をしてくださった。

滞在中の拠点は、研修としての受け入れ先である大田の国立文化財研究所とされ、出張として各地に赴くことになった。出張には基本的に研究企画課の引率があった。ただ、大田の研究所には調査対象の資料がないため連日の出張となり、結局、大田にはほとんど滞在しなかった。

四、慶州での調査

今回の調査対象の一つに新羅の土器を選んだ。その目的は、分布状況から新羅の三国統一過程を知る手掛かりを得ることと、新羅中心部を知ることである。新羅の土器の調査は、慶州と扶余の国立文化財研究所を中心に実施した。

慶州での調査は一月三〇・三一日、二月一―一七日で、そのうち国立慶州文化財研究所（以下、慶文研）で五日間、国立慶州博物館（以下、



写真1 月城塚子出土土器の調査風景
(2020年2月12日、国立慶州文化財研究所にて)

慶州博）で一日を費やして月城塚子周辺出土土器九六点の熟覧・実測・写真撮影を行った。慶文研では崔文楨さんのお世話になり、塚子の調査概要についてご教示いただいた。また、資料収集では金東河さんと、平成二四（二〇一二）年に当研究所に招請した崔智明（チャンミ）さんのご協力により、月城の発掘現場を朴正宰さんにご案内いただいた。慶州博では、新羅千年宝庫と呼ばれる収蔵庫兼展示等施設で調査した。この施設では収蔵品の登録作業や資料調査のほか、収蔵庫の手前の作業空間をガラス越しに見学することができ、展示室は収蔵庫を模したものになっている。資料の収蔵・管理と公開の

モデルとして注目されるが、資料調査を行った閲覧室も通路に面してガラス張りになっている。机はガラスに向けて置いてあるので、入館者が来る度にのぞき込まれるのはさすがに落ち着かなかった。

資料調査が終わってからは、慶文研の車や徒歩で周辺遺跡の踏査も行った。慶州では、史跡月精橋をはじめとして、古墳群や山城の整備が驚くほどのスピード感で進められている。かつての、どこか明日香村にも似た独特の雰囲気は見る影もなく、故郷がなくなったようで物寂しい。

月城の全面的な発掘調査や月池（雁鴨池）周辺の調査・再発掘も復原整備を前提としたもので、月城埧子はすでに復原工事に着手していた。復原整備は往時の状態を理解しやすいが、上部構造の復原については専門家からの異論や反対も多いと聞く。また、整備ありきで短期間のうちに古代国家の王宮中枢部を掘り返してしまうことへの抵抗も少なくないようだ。

月城に隣接する慶州市宮の新羅王宮映像館では、復原された華やかな新羅王京のようすをCGで紹介していた。七～八世紀代の時代設定に、五世紀代の王陵出土品のような、新

羅を象徴する煌びやかな装身具や装飾、食器が登場する。また、王宮・王京の復原は発掘調査の成果に基づいたものとは言いがたく、実態と著しくかけ離れている印象をうけた。

慶州は韓国でも有数の観光地だけに、館内には小さな子ども連れが多い。基礎知識のない子どもや海外からの観光客にとってはそれが新羅王京の正しい姿として印象づけられるだろう。今後の復原整備では、十分に検討された調査研究の成果が反映されることを願いたい。

五、公州・扶余での調査

二月七日、文化財研究所考古研究室の方々と公州大学校で開催された学術シンポジウム「百濟遺跡の最新調査と研究成果」に参加した。翌八日は休日であったので、一人で大田から市内バスと高速バスを乗り継いで公州市へ行き、宋山里古墳群、艇止山遺跡とその周辺、公山城とその周辺約一七kmを踏査した。遺跡の位置関係と地形、眺望を確認し、地図では気付かなかった関係性を推測することができたことは大きな収穫だった。

二月二〇日、考古研究室の鄭聖睦さんの引率で公州大学校を訪問し、

公山城の発掘現場を見学した。調査担当者の李賢淑さんには公山城内をご案内いただき、これまでの調査概要を教えていただいた。また、夕刻に百濟地域の中心的遺跡を管理する百濟王宮核心遺跡保存・管理推進団を訪問した。

二一日からは扶余文化財研究所（以下、扶文研）に移動し、二週間の調査予定を組んで研究所敷地内の官舎を利用させていただいた。扶文研では黄仁鎬所長はじめ、金大永さんらに大変良くしていただいた。

二二日、休日を利用して扶余郡内を約二四km踏査した。八時に市内バスで陵山里古墳群へ向かい、古墳群、



写真2 扶余の羅城踏査風景
(2020年2月23日、扶余邑鹽倉里にて)



写真3 官北里遺跡の発掘調査風景
(2020年2月27日、扶余邑舊衙里にて)

陵寺、羅城、呉山を確認した。門から官北里へ向かい、途中で錦城山に登った。下山後、推定朱雀大路を南下し花枝山遺跡、宮南池へ。そこから北上して定林寺跡、定林寺跡博物館を見学した。定林寺跡博物館では、調査希望資料ながら所在不明と回答があった資料が展示されているのを偶然みつけた。すぐさま研究企画課の崔智燕さんにカカオトークで資料調査の調整を依頼した。その後すぐに対応してくださったおかげで、後日、無事に調査することができた。

その後、双北里へ向かい、旧道を西行して官北里遺跡を見学。西へ抜けて錦江に沿って南下し、浮山と王興

寺跡の位置と官北里遺跡から西側の地形を確認しながら官舎へ戻った。

二三日、百済古都文化財団の沈相六さんのご案内で泗沘都城関連の遺跡を踏査した。扶蘇山城から南へ一〇km離れた加林城からは周囲を一望でき、南に弥勒山、東北東に破陣山、石城山城、北に泗沘都城を望むことができる。浮山からは錦城山、呉山が一直線に並んでみえた。また、東羅城の痕跡と門跡をすべて見て回ることができた。

二月二四日～三月五日にかけて、扶蘇山城・官北里遺跡・王宮里遺跡から出土した新羅の土器を国立扶余博物館と扶文研で調査した。それと並行して、定時以降に扶文研の図書室に籠もり、韓国全域の報告書から新羅の土器の出土例を集成した。毎晩遅くまで作業させていただけたおかげですべての報告書に目を通すことができ、資料の傾向を把握できたのは大きな収穫だった。

扶余滞在中には、金大永さんに官北里遺跡の発掘現場と扶蘇山城をご案内いただき、黄仁鎬所長と金容民さんには大変お忙しい中、羅城付近の踏査にも連れて行っていた。また、百済都城に関する資料収集もあわせて実施した。

六、そのほかの訪問先

後述するように、新型コロナウイルスの影響で正式に訪問することは叶わなかったが、休日を利用して金海地域の博物館や遺跡も廻った。

ソウルでは、国立中央博物館で李炳鎬さんらと面会して情報収集し、漢城百済博物館の崔きり(チュンギ)さんと漢城百済学研究所の李奕熙さんに夢村土城の調査状況を現地でご説明いただいた。また、慶州での調査を終えたあと、慶州駅から列車に乗り、大田経由で忠州へ向かった。

忠州文化財研究所を訪問し、韓志仙さんの案内で施設見学、資料調査、周辺遺跡の踏査を行った。

ここですべての訪問先やお世話になった方々全員のお名前を挙げることはできないが、滞在中に助けていただいた多くの方々にお礼を述べたい。

なお、踏査などで一人で移動する際にバスをよく利用したが、カカオマップにはリアルタイムでバスの情報が表示されており、土地勘のない場所で大いに役立った。

七、緊急帰国

私が韓国へ出発する直前の一月六日、日本で初めて新型コロナウイルス

の感染者が確認され、韓国でも一月二〇日に感染者が初めて確認された。私の韓国派遣は、両国での新型コロナウイルス感染者の確認とともに始まったが、当初は行動制限を受けることはなかった。韓国では早い時期から駅構内や各所入口に消毒液の配置がみられ、二月に入って感染者数が急増したため、資料調査においても注意するよう研究企画課から連絡がくるようになった。二月中旬以降、徐々に感染者の発生地帯が広まるにつれ、発掘調査の開始が延期され、博物館も閉館が増えてきた。二月二六日には、日本政府が大邸および慶尚北道に滞在歴のある外国人の入国拒否を決定した。

幸いなことに、大田も当時滞在していた扶余も感染者はなく、マスク着用と体温測定の手指示はあったが、発掘調査も通常通り行われていて、調査活動や日常生活で特に制限されることはなかった。しかし、三月に入ると事態は急速に悪化する。帰国までの経緯は次の通りである。

三月三日、慶尚北道での新型コロナウイルス感染拡大を考慮して一六日に予定していた伽耶文化財研究所の訪問を中止する。

三月五日、日本政府が韓国全土へ

の不要不急の渡航中止を勧告。中国・韓国からの日本人入国者への検疫を強化し、指定場所での二週間待機、公共交通機関の不使用を要請。九日午前〇時から運用開始、三月末までと発表。同内容を二時四五分に在大韓民国日本大使館からの情報メールで確認する。この時点で、近く急な帰国もあると思ったが、それは想定よりも早く訪れた。

三月六日、いつも通り扶文研へ行き、定林寺跡博物館での資料調査の準備をしていた九時頃、当研究所企画課より八日までに帰国せよという指示連絡が入る。すぐに翌日以降の予定を中止し帰国便を確保。八日は満席のため七日の便で予約した。

一時～一時三〇分、定林寺跡博物館で資料調査を済ませ、扶文研で荷物整理。一三時三〇分、黄仁鎬所長に帰国挨拶し、金大永さんの運転で大田の文化財研究所へ。一五時に到着するや否や、皆さんに手伝ってもらいながら荷物を段ボールに詰め込み、大急ぎで郵送の手続きを行った。ゲストハウスで清算を済ませ、一七時に慌ただしく文化財研究所にて帰国挨拶。夕食は考古研究室の方々と最初の最後の会食となった。会食後、忠原文化財研究所の田庸昊さ

んの運転で益山へ移動した。田庸昊さんは王宮里遺跡の発掘調査を担当され、多くの研究成果を発表されている。地元の羅州に戻るのを利用して遺跡をご案内してくださった。当研究所にも招請し、私も学生時代から存じ上げているが、感謝の言葉もない。

三月七日、田庸昊さんのご案内で王宮里遺跡と弥勒寺跡を踏査し、益山から一二時三〇分発のリムジンバスで金浦空港へ。搭乗口は日本への帰国を待つ人で溢れており、この時に初めて感染の恐怖を感じた。一六時五五分、定刻通りの大韓航空で帰国した。

八、おわりに

冷え込む日韓関係の最中での訪韓。出国間際まで繰り返し返されたメールや電話でのやりとりは、日韓関係を反映したかのように無機質なものであったこともあり、私は少し身構えていた。しかし、実際にお会いした崔智燕さんはとても気さくな方で、拍子抜けしてしまった。そして、ありがたいことに、滞在中にお会いした方々は皆さん親身になって私の面倒をみてくださった。個人個人の関係は、韓流ブームで両国の関係が良好だった

ところと何も変わらない。これまで両国の研究者によって培われてきた親密な交流に感謝するとともに、今回の韓国派遣でお世話になった方々との繋がりを大切にしていきたいと思う。また、派遣期間は当初の予定より一三日も短いものとなった。二か月のうちの二週間の短縮はとて大きく、非常に残念ではあったが、滞在中は終日没頭できたし、その間に自分にやれることはすべてやったと思う。資料調査や踏査で得られた知見も多く、今後の研究に活かしていきたい。

最後に、韓国派遣の機会をくださった檀原考古学研究所と受け入れを許諾してくださった韓国国立文化財研究所の関係者の皆様に心より感謝いたします。

ひとの動き

(退職 令和二年九月三〇日付)

漆原尚輝 調査部調査課調査第一係

会計年度任用職員(発掘調査)

(退職 令和三年三月三一日付)

米田康彦 副所長

榑本 保 総務課総務係長

(転出 令和三年三月三一日付)

中野 咲 調査部調査課調査第一係

主任研究員

↓同 調査第一係主任研究員

員/文化・教育・くらし

創造部文化財保存課記念

物・埋蔵文化財係主査・

兼務

山田隆文

調査部調査課調査第一係

指導研究員

↓同 調査第一係総括研究員

/文化・教育・くらし

創造部文化資源活用課世界

遺産係調整員・兼務

(転入・所内異動 令和三年四月一日付)

矢富直樹

文化・教育・くらし創造部

こども・女性局こども

家庭課長

佐藤秀樹

議会事務局議事課議事係

主任主査 書記

奥山誠義

企画学芸部資料課資料係

指導研究員

岡田雅彦

調査部調査課調査第一係

主任研究員/文化・教育・

くらし創造部文化財保存課記念物・埋蔵文化財係

主査・兼務

↓同 調査第一係主任研究員

前田俊雄 調査部調査課調査第一係

主任研究員/文化・教育・

くらし創造部文化財保存課記念物・埋蔵文化財係

主査・兼務

↓同 調査第一係主任研究員

持田大輔 企画学芸部企画課企画係

主任研究員/文化・教育・

くらし創造部文化資源活用課活用企画・世界遺産

係主査・兼務

↓同 企画係主任研究員

文化・教育・くらし創造部文化資源活用課世界遺産

係主査/文化財保存課記念物・埋蔵文化財係主査・兼務

平井洸史 企画学芸部企画課企画係

技師

↓同 学芸課学芸係主任技師

辰巳祐樹 調査部調査課調査第一係

技師

↓同 主任技師

宮原晋一 調査部調査課調査第二係

主任研究員(再任用)

↓同 技師補(再任用)